

大正十年

(一月)

一月一日 甲子 土曜 晴。

四方拝。朝、勤行はしめ済で、当家にて一同屠蘇、雑煮を祝ふ。例年なからみな無事、この悦かきりなし。来賀客、続々として賑はしき。

受信 年賀状、は書、名刺、五百通余也。

*は書(端書)

一月二日 乙丑 日曜 晴朗。

昨日の如く一同雑煮、其外みな同し。賀客、夜までも賑々し。

一月三日 丙寅 月曜 晴。

朝、勤行。雑煮等元日の如し。朝八時より酒井伯の自動車にて年賀廻りをする。始、閑院宮様より東伏見宮、華頂宮、皇太子殿下、北白川宮、竹田宮、東久爾宮、久爾宮、朝香宮、梨本宮、有栖川宮、伏見宮、山階宮、宮内大臣と、年礼済して十一時半也。写真大武氏を呼て一同撮影す。賀客続々来る。

*東久爾宮(東久邇宮) *久爾宮(久邇宮)

(二月四日〜七日、記載ナシ)

一月八日 辛未 土曜 晴朗。

新年始業式。朝八時、職員生徒一同式場集る。始、勅語、次、名誉校長、次、校長演舌、主事も、校歌。式畢而、本年ハ福引をやめて、余興、狂言六地藏、たい(太)神楽、これもよほど面白し。昼迄二済。

*たい神楽(太神楽)

(二月九日、記載ナシ)

一月十日 癸酉 月曜 晴朗。

早起。勤行如例。宮中参内日にて髪も永かもしを附て桂緋袴の行装、李子着付してくれられ、九時自動車にて、付添石山氏。直二東御車寄より御玄関に上る。時、井上通泰氏、私か先生を御つれ申とてご案内なし下され、御一同の御詰所に参る。一条公はしめ入江様、知己の方多くて嬉し。鳳凰の御間、実に結構。

*永かもし(長かもし)

一月十一日 甲戌 火曜 雨。

朝の勤行如(衍)例の如し。賀客続々。午下より入江子ニ御礼に行。大森氏えも行て御夫人に御目にかゝりて暫時面晤して、宮内大臣官邸にも行。井上氏を訪て、幸御在宅にて種々御咄しにて時を移す。夕景帰。

*幸(やうはひ)

一月十二日 乙亥 水曜 晴。

朝、勤行如例。佐々木信綱君え行。面晤暫時にして帰。徒歩して行。正午より千駄ヶ谷田中氏え行。こゝより久米民之助え使出ス。夕景帰。

一月十三日 丙子 木曜 晴。

朝、勤行済て、内務大臣床次殿え返書出ス。本多日生君より十五日午下二時に光臨の由申越れ、直二返書出ス。

一月十四日 丁丑 金曜 雨。

朝、勤行済て此日より学校例の如く教受ス。宮内省え御礼に参る。午下二時に北の御車よせより参る。花松典侍様え十日御歌御会始の御陪観聞召れたるを御礼申上る。早速、御電話にて葉山御用邸え御参りの事申上ると申されたり。種々御会始御式の御模様委しく仰承りたり。御留主様中にてゆる／＼御咄共いたして、御合物結構々々に戴て、此時丁度十四日の御焼かちんの出来たて、大／＼暖なるをいたゞき、此様なよき都合ハないと仰せられ候。十四日に限る事とて、時間早くてもおそくても、この御出来たては好々都合なりと仰

せられていたゞき候。何に付ても有難き事共也。四時退出ス。

*教授(教授) *御留主(御留守)

一月十五日 戊寅 土曜 晴。

朝、清めして勤行ス。小豆粥を祝ふ。来客、大束主事細君、林里子。如約、本多猊下御来臨を待もうけたり。電話にて要用出来三時半にとの事也。同時刻に御来臨ありて御携の御書賜りたり。御万多羅、実に御筆蹟の御見事なる、外に寿量品の我常住於此以諸神通力令顛倒衆生雖近而不見、是玉盤箋全紙に御揮毫にて実に积尊御来光と奉仰の外なく感泣ニ堪たり。御宝前にて御読経ありて諸聖靈この法施に浮み上りたりと思ふ。一寸御合のものなとさし上て、七時頃迄何くれと御咄しありて御帰になる。

*御万多羅(御曼荼羅)

一月十六日 己卯 日曜 晴。

朝の勤行済て、午下早々東京駅に堀田伯御帰朝を迎ふ。暫時にして電車着。久々にて伯に逢ふ。至極御健全にて御容貌殊に御ふとりにて、又々丈も御のひに成りたる様也。御迎人も大勢い。御機嫌よく御帰朝めてたし。それより、時ハ二時二付、統一閣え参る。慶讃会講演今始まるうかと云時也。本多師にも御目にかゝり昨日の御礼ニ申上る。御講演拝聴してまた本堂に大衆つめかけ掉かけたる群衆の中、本多師の講演をきゝて帰。李子ハあさより横浜行。蓬菜やにて堀田伯を御迎え申て、方々え行、夜に入て帰。

*掉かけたる(押かけたる)

一月十七日 庚辰 月曜 陰。

朝の勤行済て学校課業如例。来客、宮内大臣夫人中村くに子さま、御出にて暫時にして帰られたり。

一月十八日 辛巳 火曜 晴。

朝の勤行済て火曜の稽古する。午下早々、村井吉兵衛氏二行。見舞をのへて先々切断後経果よろしき由、医師ハ未だ安心に至らぬ(と)申されたれと、先々熱もなく余病も出されハよろしきよし也。それより三条様え御年始申上、千代子様に御目にかゝりて種々御はなし

申上て、中村元嘉氏を問ふ。微恙のよし、不逢。綾子に逢て帰。

*経果(経過)

一月十九日 壬午 水曜 晴、陰。

朝の勤行済て、綾小路師前、石山吉子さまえ使出ス。

(二月二十日〜二十七日、記載ナシ)

一月二十八日 辛卯 金曜 雨。

勤行如例の、課業も。午下より空あしく、五時比よりあめふり出し、夜もよほと降て明日を大に心配。夜半頃より空も晴らしく成て有難き事也。

一月二十九日 壬辰 土曜 晴朗。

昼迄の授業ありて、其外すへて準備ととのひ、午下一時より泉会発会式。式場にて続々會員集りて、二時一番之余興、落語二番、次洋州楽、ヒヤノ、プワイオリン、セロ二番面白く、寄宿食堂にて持寄福釣はしまる。百五十番迄大くさわき、賑々しく終る。四時、余興畢る。食事開ける。弁松折詰と御すしと始屠蘇を拝領の銀杯にて廻し献杯式。万歳をとなへて本日の呼物、長坂の御そば、鶏肉。昨夜十一時過迄黒人の料理にて、頗る美味。舌を焼やうにあつくして一同大悦。此時、私の扇子と横ものと一品の福福引ありて、五時半めて度散会す。跡残りの方、夜八時過迄。

*プワイオリン(ヴァイオリン) *長坂(永坂) *黒人(玄人) *福福(衍)引 *めて度(目出度) *跡(後)

一月三十日 癸巳 日曜 晴。

朝、勤行例の如し。

一月三十一日 甲午 月曜 晴。

(二月)

二月一日 乙未 火曜 晴。

朝の勤行済で、火曜稽古する。午下二時過より北条家に行。帰途、姉小路に延子さまも問ふ。先ヅリ々々と快方に迎はれたる様子にてはなしぶりもよほとシツカリと思はれ、此ならはと大ゐに安心致し候。已而帰。不在中、鈴木智恵子、其姉と来りて此度縁談とゝのひてこの十三日とかに結婚式を挙ると云事也。

二月二日 丙申 水曜 晴。

二月三日 丁酉 木曜

朝、勤行例の如し。津田弘孝、香港より今朝八時四十分無事着京。午下早々、雪ふり出して夕方迄には六七寸。

筆置て窓の外みれば面白く面替りせり庭のしら雪

発信 京都姉小路さまえ。高くらさまえ。名古屋や中村清。

*名古屋や (名古屋)

二月四日 戊戌 金曜 晴。

受信 京都高倉様より小包及文着。

二月五日 己亥 土曜 晴。

山梨小野清太郎、岡山森長常夫え小包郵便出ス。

二月六日 庚子 日曜 晴。

朝夕、勤行例の如し。森氏より招待にて、予、李子と帝劇二行。外三、朝くら、井上、岡村の三人 李子より、同伴する。十一迄に帰。

*朝くら (朝倉)

二月七日 辛丑 月曜 晴。 予記 本多師来、講演午〇時半。

朝夕、勤行例の如し。午後〇時半、本多師同伴の僧と来臨。講堂にて講話あり。生徒も始而聴聞する。人道精神修養之事面白く解れたり、三時半迄。

二月八日 壬寅 火曜 晴。

朝夕、勤行例の如し。火曜の稽古する。本多師え昨日之挨拶に使出ス。

二月九日 癸卯 水曜 晴。

朝夕、勤行例の如し。終日揮毫ものす。来客、小林鐘吉、嘉吉す賀子 此度、須磨え移転ニ付暇乞に来る。

*小林鐘吉(小林鐘吉)

二月十日 甲辰 木曜 晴。

朝の勤行済て、来客、観世より武田氏来て、此度縁談破談を申来りて大に驚々たり。然しやむを得ぬ事にて残心々々究りなし。午下より、予、新田氏え行、観世より破談の申込を申伝えたり。

二月十一日 乙巳 金曜 雨。

紀元節休業。朝十時より先堀田伯え行。正恒様ニ御面晤、しはらく欧州談もと存たれと暫時にして帰。夫より上野精養軒ニ竹柏会ニ会す。此日ハ九州の白蓮女史上京ニ付、九条竹子様も御出にて少数之談話会のよし。みな打寄て互に御咄しをといふ。余興、富本、都路の三番叟と夕霧、是もまた面白く二番をきゝて、昼餐を済せて 写真も三度写す、 二時退散。

*九条竹子様(九条武子様) *都路(宮古路)

二月十二日 丙午 土曜 雪と雨。

朝の勤行済て終日調べものス。大藏経要義六卷拝読畢。藤井瑞枝より鱈の子かす漬一曲着。

二月十三日 丁未 日曜 晴。

朝の勤行済て十時より近藤廉平男告別式に焼香して帰。李子ハ横須賀え軍艦の見学ニ行。

予、午下一時より浅草統一閣日蓮上人七百年降誕会に参詣す。先読経、大勢の僧侶音楽入。畢而大迫氏の講話、笹川臨風、日生師 是御講話には感佩之外無候。 夕景帰。李子等八九時過横須賀より帰。大蔵経要義七卷二かゝる。毎夜拝読す。

二月十四日 戊申 月曜 晴。

朝、勤行済て課業例の如し。

受信 木津法専より。

二月十五日 己酉 火曜 晴。

朝、勤行済て火曜の稽古する。河島八枝子来りて面会す。観世よりの破談の申込二付、種々の成行もきゝたれと、これ中傷的も多き様に思はれたれと、八枝子もよくあきらめて清く御受をすると云事になりたり。先々安心々々。

地大に震ス。

発信 藤井瑞枝え。

二月十六日 庚戌 水曜 雨。雨はけし、夜もふり通したり。

朝の勤行済。田村道太郎氏、河島八枝子の此度破談の事件二付、挨拶に来る。種々の実説を聞いてみると、中傷的にて観世氏中傷に当てられたるやと思はれる。気の毒なのハ本人ふたり也。

二月十七日 辛亥 木曜 晴。

朝の勤行済て、来客、高田馬場より正子、昼餐を供にして午後帰。揮毫ものス。来客、本郷の人田中氏の細君と、北埼玉の人小島つね 入学願人也。

*供に(共二)

二月十八日 壬子 金曜 晴。

朝の勤行済て金曜の課業如例。午下一時、三条家の実美公の三十年祭参拝ス。御同家今日の御祭典二付、委皆御手入出来て御奇麗に建替りたる如く立派也。真榊をさゝける。三十年とは驚き入たり。同家の相談役たる人士方をはじめ、大かた故人二なられたり。資君様

ニも長く今昔の御咄しに時を移して、夕景帰。

二月十九日 癸丑 土曜 晴。

朝の勤行済で、午下一時より地明会二行。読経済で本多狛下の講話ありて、後茶話会、済て帰。

二月二十日 甲寅 日曜 晴。

朝の勤行済で来客続々。

二月二十一日 乙卯 月曜 晴。

朝、勤行例の如し。月曜課業例の如し。来客続々たり。朝、水戸徳川様より秋庭院殿昨廿日御逝去のよし御しらせ有たり。直に李子より弔電ス。万里伯と李子同行にて松戸徳川家に御悔みに行。

二月二十二日 丙辰 火曜 雪。

朝の勤行済で、火曜の稽古する。雪は暫くにして消たり。後晴天。

二月二十三日 丁巳 水曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

二月二十四日 戊午 木曜 晴。

朝の勤行済で、九時より竹田宮様え参り候処、妃殿下御不在にて御昼迄ニは還御あらせられるはつ二付、夫迄待くれ候様二付、毛利公爵様え上り、久々に安子様ニ御対面申上、御二度もいたゞき、ゆる／＼あそひて、二時頃竹田宮様え参り、早速妃殿下ニ拝謁仰付られ、何くれと御咄し申上て種々拝領ものいたして退出する。夕景雨ふり出しました雪もふる。志賀鉄千代さま夜十時過迄、夕飯を共にする。

*はつ(管)

二月二十五日 己未 金曜 晴。

朝、勤行済て、課業例の如し。
竹田宮様、毛利さまえ御使出ス。

(二月二十六日、記載ナシ)

二月二十七日 辛酉 日曜 晴。予記 京橋第一生命保険会社前に六階二会す、若菜会。
右ハ断候。

朝、勤行例の如し。午下より閑院宮様え参り、宮殿下ニは此度東宮殿下御渡欧あらせられ
(衍)るゝニ付、御随伴あらせられ (衍)るゝ御暇乞に参りたれと、本日は葉山え御
暇乞に御参内ニ而御留主様ニ付、妃殿下ニ拝謁して此度の御随伴ハ御せき任の重きをも決
而御心配なく、私一生懸命に天神地祇に御禱願申上候間、御安心々々被遊様にと種々御咄
申上而退出ス。

*留主 (留守) *せき任 (責任)

二月二十八日 壬戌 月曜 晴。

朝の勤行済て、五年生画の揮毫に午下四時過迄。

(三月)

三月一日 癸亥 火曜 晴。

朝の勤行例の如し。火曜稽古する。来客、中野より泰来る。又斎藤仁子も。夕食を供にす
る。十時頃迄。

*供に (共に)

三月二日 甲子 水曜 雨。

朝、勤行済て、揮毫ものス。有約、中六番町坂本氏ニ行、午下二時より。此会ハ老婆之会
合にて三弦、琴、一弦琴、尺八等にて合奏、面白き会合也。夜七時過迄。

三月三日 乙丑 木曜

皇太子殿下愈御渡欧、御出発あらせられる。閑院宮殿下御随伴あらせられる。本日より兩殿下御一行、供奉員一同の御機嫌よく御安全ニ付（ママ）、御当着、国威を御かゝやかしをも、また御めて度御帰朝を天地神祇に御禱願申上る。李子ハ朝五時より生徒等五十人を引具して、御道筋に奉送申上る。朝十時より午下四時迄、五年生ニ絹本に画を揮毫させる。

三月四日 丙寅 金曜 晴。

朝の勤行済て、揮毫ものス。

善光寺宮田広導え中沢伊豆子よりの金廿円返却ス。

三月五日 丁卯 土曜 晴。

朝、勤行済て、午下早々、閑院宮様え詣し、御息所に拝謁して何くれと御咄し申上。宮様の御同伴大責任ニ付て、私一心に御加護の御祈禱申上候ニ付、御安心を願ふと云々。長座して万里伯を問ふ。此時、林丘寺慈堂、風早愛子、丁度出会申て大悦。久々の対面にて嬉し涙に袖ぬらしたり。夕餐も饗せられて八時過帰。此時、小雨ふりたり。

三月六日 戊辰 日曜 晴。

朝、勤行済て、日曜休みなく朝九時より生徒成作物を見る。午下二時済。来客、葉室伯。夕景、万里伯御出にて種々昔日御一新前の咄しに長して、十一時過ニ御帰り也。

*成作物（製作物）

（三月七日、記載ナシ）

三月八日 庚午 火曜

朝のつとめ済て、九時より五年生の画を見る。午下四時過まで。

（三月九日、十日、記載ナシ）

三月十一日 癸酉 金曜

朝のつとめ済で、五年生の画をする。

(三月十二日、記載ナシ)

三月十三日 乙亥 日曜

朝のつとめ済で、午下六時より長谷川氏の結婚披露会ニ築地精養軒に行。李子同伴。始め講演の余興ありて、後食堂開かれて先々めて度、式畢りて八時帰。

*めて度(目出度)

(三月十四日、記載ナシ)

三月十五日 丁丑 火曜 晴。

此日ハ火曜日ながら稽古を休みて、五年生卒業製作物を本日より外に余日なくて、朝より九時はしめ、午下五時迄にて悉皆書畢る。

三月十六日 戊寅 水曜

朝のつとめ済で、午下より川はた氏へ行。御夫人風邪にて今日の稽古御休みの趣にて、それより坂本氏電話かけられたれハ坂本氏え来てくれと云事になり、則坂本氏を問ふ。甘利寅雄女来られて稽古して帰。

*川はた(河鱒)

(三月十七日、記載ナシ)

三月十八日 庚辰 金曜 晴。

朝のつとめ済、午下一時より堀田伯二行、例会。五時過帰。

三月十九日 辛巳 土曜 夜晴、雨。

雨。朝、勤行済で、九時より五年生送別会始る。一年より四年迄の芸事、独唱、英語会話、

長唄、種々芸術をこらして感心すへきものもある。昼迄十二番もある。午餐会、おすもし、折詰などにて午下二時余興はしまる。四時すへて済。また食堂にて茶菓の饗応ありて、めて度済。

*めて度(目出度)

三月二十日 壬午 日曜 晴、強風。

朝より御宝前勤行済て、九時より麟祥院え李子と同行参詣ス。角田竹冷氏三年忌読経二逢て、昼折詰を饗にて帰る。画の筆入する。

三月二十一日 癸未 月曜 晴。

春季皇霊祭執行奉事ス。朝より御宝前払清めて神饌を供する。勤行、拝読。昼、ちらしすしにて一同え供養する。来客、下瀬房子小供と来る。画の筆入する。

*小供(子供)

三月二十二日 甲申 火曜 晴。

朝、勤行済て、火曜稽古する。

三月二十三日 乙酉 水曜 晴。 予記 地明会、午下一時半。

朝の勤行済て、画の手入する。午下一時より地明会に参詣する。彼岸二付、かしは餅一同え供養する。数、百五十也。御講話聴聞して帰。

(三月二十四日〜二十七日、記載ナシ)

三月二十八日 庚寅 月曜 雪。 予記 予ハ謝恩会に出席ス。

朝、雪と雨也。卒業生の謝恩会執行。此朝、姉小路より延子容体あしくとてしらせあり。直に治子行。跡より予も姉小路え行。容体あしきながらも意識はたしかにて、まだく本日にてはなきと思ひたり。其内、北条姉道子さま御出。李子もきたりて看護。予ハ頭をなて、一心に題目をとなへつゝ、其内容替り来て今こそ一大事の臨終正念、自我偈を道子さま★(口+甬)へたしになりて、みなく臨終を御題目の声諸共に往生せられたり。結構

々々なる御臨終にて皆々有かたさに声を上げて感泣したり。午前十時廿分也。李子は御死体の御掃除万端して遅く帰りたり。

*跡(後) *★(口+甬)へたしになりて(誦へたしになりて)

三月二十九日 辛卯 火曜 晴。

朝の勤行済で、姉小路へ行。良子様え電報三度目にて御返電、今朝八時何の汽車にて東京駅夜八時廿五分着の由返電にて、此方に御宿致すべく準備いたして、夜七時半東京駅二行。八時廿五分、御無事御着。予、のり重、万里さま御迎ひに入らせられて、良子さま自動車にて五軒町姉さまえ直に成らせられ候。御入棺にも御逢ひに成りて御帰宅。此方に御一泊。
*のり重(憲重)

三月三十日 壬辰 水曜 晴。 予記 鳥尾、三井両家結婚披露会、断る。

三月三十一日 癸巳 木曜 晴。

朝の勤行済。良子様、予、同行、朝九時より姉小路へ行。棺前祭済で十時より告別式。続々御弔客ありて中々の盛式也。十二時相済。昼飯御弁当にて二時出棺。落合火葬場二良子様も成らせられる。予、李子へ前に帰る。五時頃御帰りになる。此夕、清水氏来る。已而帰。

(四月)

四月一日 甲午 金曜 晴。

朝の勤行済。良子様、李子同行、御骨上ケに行。予ハ午後より姉小路二行。読経ありて、夜、真清浄寺主来りて読経ありて、夜、良子様と共に帰。

四月二日 乙未 土曜 晴、夜雨。

朝の勤行済で、朝良子様五軒町え成らせられる。予ハ正午より田中氏へ行。延子の法事勤められ、一同読経ありて後、五軒町え帰。夜、真清浄寺主来りて、みな読経上て帰。本日

より良子様五軒町滞在。

四月三日 丙申 日曜 雨。

朝の勤行済で、午下一時半より光円寺二行。延子さま初七日法事。大せいの参詣人もありて賑々しく候。読経ありて御墓所も究る。寿邦院殿の右の脇に定る。終日の雨にて夜に入て暴風雨となりて、寄宿舎の裏の籬根四五間ほとみな竹籬もみな流失したり。可驚。

来客、富山県下新川郡魚津町加藤忠平。

*究る〔極々〕

四月四日 丁酉 月曜 晴。

朝の勤行済で、旅行の拵する。来客、新田細君、御礼に来る。

四月五日 戊戌 火曜 晴。予記 午後三時埋骨式、光円寺中に。

朝の勤行済で。来客、下瀬房子、小児始めて見参す。よくふとりたる、りゝしき娘にて末たのもし。

(四月六日〜九日、記載ナシ)

四月十日 癸卯 日曜 晴。三日月よく晴、清く拝めたり。

朝の勤行済で、姉小路様に行。良子様二御目にかゝりて此程よりの御礼申上る。已而帰。

来客、九州梅の〔野〕くら子、斎藤仁子、辰子に逢て久々の咄しにし〔衍〕て竹柏会二行。会場有楽町一ノ一。四時過帰。

四月十一日 甲辰 月曜 晴。

朝の勤行済で、八時始業式二出務。五島よし子さま、今夜八時東京駅着二付、銀を迎に遣し候。九時過御着にて此夜一泊。

四月十二日 乙巳 火曜 小雨。

朝の勤行済で、火曜の稽古日、稽古する。姉小路良子様、明日御出立二付成らせられる。

午下早々、御参内被遊由、暫時にして御帰邸也。五島様二泊。

四月十三日 丙午 木曜 小雨。

朝、勤行済て、午下より閑院宮様え参り、御憩所殿下と四方山の御咄し申上、御雛様の御前にて御合のものいたゞき、御庭の花真盛り、今年も無事に御苑の花をみる。已而帰。この道すからの花、実に花にてさきうずみたり。良子様今夜七時三十分にて御帰京ニ付、予、李子と御見立する。先々御無事、無恙御出立相成たり。

*さきうずみたり（咲き埋みたり）

四月十四日 丁未 水曜 小雨。

朝、勤行済て、絹本二枚揮毫する。此夜、土井田鶴子、斎藤仁子。

四月十五日 戊申 木曜 小雨。

朝の勤行済て、絹本式枚揮毫。課業はしむ。

四月十六日 己酉 金曜 晴。

朝の勤行済て、絹本二枚揮毫ス。朝十時頃神代氏より電報着、今夜八時半東京着迎ひたのむ。来客、鈴木喜代、其母と。神代氏は此方ニ来るへきとて種々準備する。李子迎に行。されとも河村鉄也氏ニ行。

受信 姉小路良子様より御礼の御文着。

四月十七日 庚戌 日曜 晴。

朝の勤行済。正午頃、正子来る。姉小路延子の三七日法事に光円寺え参詣する。畢而帰。花はみな葉桜となり、早く事かな。

受信 姉小路良子様え御返事する。

*早く事（早き事）

四月十八日 辛亥 月曜 細雨。

朝の勤行済て、午下早々弥生町堀田伯ニ例会に会す。玉枝もはしめて来る。五時帰。夜又

雨ふる。

四月十九日 壬子 火曜 晴。

朝、勤行済。火曜稽古日。明廿日、観桜会ニ被召御招状拝受いたし候。神代夫婦より明廿日来ル様申参り候へとも、不在中ニ付断申候。

四月二十日 癸丑 水曜 晴。

朝勤行済て、午下一時より新宿御苑ニ催さるゝ観桜会ニ被召。本日御天気も晴朗、御苑の桜花真盛りも、ちりたるも、また咲出ぬもありて、是迄とは御苑も大々の御広く、さすかに御苑かなと拝見する。此日、参集観人ハ約八千人と云。此御広き御庭に当年ハ白襟紋付もさしゆるされたれハ、夫人令嬢の夥しき事目もあやに、やかて皇后陛下御出御成りて拝礼済て食堂に拝食す。瀬川博士種々御世話下され、また耳博士岡田和一郎君御夫婦にて食事万端御せわ下され、大めに都合よろしく、五時帰。京都姉様え日蓮聖人の教義一冊郵送する。

四月二十一日 甲寅 木曜 晴。

朝、勤行済て、絹本二枚揮毫する。午下、桃園会小石川植物園に開催にて、予も参集する。

四月二十二日 乙卯 金曜 雨。

朝の勤行済て、午下四時半より林忠雄と磯部百合子の結婚披露会、帝国ホテルへ行。李子同行。総理大臣原様をはじめ大蔵、文武大臣かた一流の方多く、盛会也。九時過帰。

*総理大臣（総理大臣） *文武大臣（文部大臣）

四月二十三日 丙辰 土曜 晴。

朝の勤行済て、絹本揮毫する。神代夫婦来りて一泊。

四月二十四日 丁巳 日曜 晴。

朝の勤行済。午下四時半より李子同行にて帝国ホテルへ行。粕谷金次と鈴木喜代子と結婚披露会ニ列ス。株式連中にて中々盛会也。九時過帰。神代夫婦帰ル。

四月二十五日 戊午 月曜 晴。

朝の勤行済て、課業例の如し。来客、志賀鉄千代、葉室伯。博多代準介、三重県岡田孫三郎、小包物出す。絹本五枚揮毫ス。

受信 京姉様より竹の子着。

四月二十六日 己未 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜稽古する。来客、神代夫婦、昼餐を共にして番町え帰る。郁之進、明日帰神のはづ也。来客、加賀美理一郎、御礼に来る。

受信 姉小路良子さまえ御返事出す。

四月二十七日 庚申 水曜 晴。

朝の勤行すむ。予、九時頃より姉小路え。仏前にて読経ありて河鱈子を問ふて暫時にして帰。津田栄子、鶴子、山根綾子来る。みな郁之進を送りて来る。鶴子一泊。神代寿子に誘はれて帝劇をみる。幸四郎、宗十郎の勧進帳を見る。団十郎以来の弁慶、感動をたへたり。二川氏よりぬき立の竹の子持参、極やはらかきのを。

*暫時〔ざん時〕 *たへたり〔堪へたり〕

四月二十八日 辛酉 木曜 晴。

朝の勤行済て、画の揮毫する。津田栄子、鶴子と買物二行。今晚ハ鶴子中野二行。後下二時、光円寺ニ参る。姉小路延子殿五十日忌ニ付、読経有て賑々しく済たり。四時過済て帰。受信 松島靖子より書至。葉山美尾野順より沖津鯉五尾、若芽沢山着。

発信 葉山美尾のえ返書ス。

*後下〔午下〕 *沖津鯉〔興津鯛〕 *若芽〔若布〕 *美尾の〔美尾野〕

四月二十九日 壬戌 金曜 晴。

朝の勤行済て、絹本揮毫ス。靖国神社臨時大祭休業。皇后陛下御行啓あらせられる。

(四月三十日、記載ナシ)

(五月)

(五月一日、二日、記載ナシ)

五月三日 丙寅 火曜 晴。

下渋谷梅林庵宮北氏の招にて、時はつれの茶事に招かる。客、万里小路伯、予、李子の三人也。先、芝の万里家に行て伯と同行。雲祥院寺中にて茶の妙味を尽されたり。心地よし。十一時過帰。

五月四日 丁卯 水曜 晴。

午下六日、華族会館にて永井子、三条艶子様との結婚披露会に参る。九時帰。

*六日 (六時)

五月五日 戊辰 木曜 晴。

午下十二時より歌舞妓え行。予、津田栄子と也。

(五月六日、記載ナシ)

五月七日 庚午 土曜 雨。

朝のつとめ済て、華族会館に行。華族白人能、及囃子等にて毛利五郎男、徳川あつし様の御招待にて、あらし山 京極、熊坂 林博、観世代理、杜若 毛利五郎、少し見て夫より葉室伯に行。雨中ながら和慰会々員よく揃て廿三人、皆々手ん手に隠し芸もあらはし、芸もありて大ノ賑々敷。この和慰会ほとたのしきハ外になし。夜九時過まで、予、李子とは酒井伯の自動車にて帰。

*華族白人能 (華族素人能)

(五月八日、記載ナシ)

五月九日 壬申 月曜 晴。

正午より浅草本願寺婦人会春季惣会ニ行。三時より統一閣にて本多師の御講話聴聞して帰。

(五月十日、十一日、記載ナシ)

五月十二日 乙亥 木曜 晴。

朝のつとめ例の如し。午下、地明会ニ行。御講話聴聞して帰。

五月十三日 丙子 金曜 晴。

早起。生徒一同、小田原遠足ニ付、東京駅ニ集ル。六時廿分發、惣員六百六十九人也。特別臨時汽車買切にて、小田原駅ニ宮様より家来御迎來りて車にて予ハ参る。此日は照もせず曇もやらぬと云、遠足ニは最上々の日也。表御門より入る。洪養閣之御前には腰かけ八百人前御出来、白布をかけて一同休足。茶菓、御弁当なども此絶佳なる景色を前にして休み、夫より各々石垣山或ハ海岸などと思ひくゝに散歩する。予、李子ハ御洋館拝見す。いまた御落製には至らず。外郭ハ惣体よほど御趣向ある御建築にて、御内様ハ松井氏、今一人老大工之設計にて、よほどの価をつかひたるは見ゆるなるへし。驚きに堪たり。四方八方の良絶景にて、またと外にはなき御別邸也。三時、各々集りて、四時の汽車にて帰。一人の病人もなき無事、可喜々々。

*洪養閣(浩養閣) *御落製(御落成)

五月十四日 丁丑 土曜 雨。

朝の勤行済て、御寺の拵へ、宅の準備ていそかし。

五月十五日 戊寅 日曜 晴。

晴天如洗。朝より御宝前御備物万端とゞのひて読経上る。此日、親戚血縁のもの昼飯を出す。伊勢忠の料理、九客也。食事済てみな光円寺へ参る。外招待の方々ニ而三時の案内にて三十二人余也。読経はしまり、各々焼香予て墓参する。墓前に槐二本、菩提樹、娑羅樹二本、其外盆栽にてつゝし、草花等、墓前に花に埋まりたり。奇麗々々。各々焼香済て帰。

茶菓子、寅やのむし菓子五種一箱ツ。又中野正子をはしめみなこゝに帰る。夕景まで。

〜 *御備物 (御供物) 〱 *予て (有て) 〱 *寅や (虎屋) 〱 *むし菓子 (蒸し菓子)

五月十六日 己卯 月曜 晴。

朝のつとめ例の如し。月曜の稽古出勤する。午下早々、閑院宮に詣し、御息所に拝謁して、小田原遠足の御礼、其外父の三十三年忌に御備えもの、其外御菓子等の御礼申上る。此時、夙川の種と其娘に逢ふ。来客、鶴子晚餐を供にする。

齋藤仁子より味噌一樽。

〜 *御備えもの (御供えもの) 〱

五月十七日 庚辰 火曜 晴。雨甚し。寒し。

朝の勤例の如し。火曜稽古する。終日揮毫ものす。来客、秋田千田勇子、島田信子、中野寿子。鶴子、昨日より来りて一泊、明日出立の拵事する。

五月十八日 辛巳 水曜 晴。

朝のつとめ済で、自動車で、予、李子、鶴子を送る。東京二 (衍) 駅に行。八時三十日発にて無事出立する。午下早々、堀田様へ行。父の年忌の御読経を願ふ。みな様え御すもし箱入四十箇を供養する。

〜 *八時三十日発 (八時三十分発) 〱

五月十九日 壬午 木曜 晴。

朝のつとめ済で揮毫ものす。田村謹寿氏より画帖依頼。

五月二十日 癸未 金曜 晴。

朝のつとめ済で、課業九時より十二時迄。来客、津田栄子、過日の御礼にきたる。三時頃より雨ふり出し雷鳴驚かしたり。何処にか落雷ありたり。夕景車にて帰。此夕、寄宿舎開きより満十年の紀年会にて、寄宿舎種々の食事、又生徒の余興数番ありて面白し。雨はれて月清し、洗ふか如し。

五月二十一日 甲申 土曜 晴。

朝のつとめ済。来客、五島守光様。

受信 松島靖子より備物着。

*備物（供物）

五月二十二日 乙酉 日曜 晴。

朝のつとめ済で、予、静子と墓参して帰。来客、北条達子さま御出にて、姉小路延子の生前より死去万端御世話さまになりたるにて御札に御出に相成たり。御宝前御参り御読経し帰られたり。

廿二日の新聞に、東宮殿下法学博士の学位捧呈、エジンバラ大学より蘇格蘭にて最大にして学位授与被遊た。日々の御祈祷もよく御加護のほと見えて、御機嫌の御よろしき御模様も伺ひて有かたしともありかたし。

宮原六之介氏え依頼もの出す、愛知県の。

*蘇格蘭（スコットランド）

五月二十三日 丙戌 月曜 晴。

朝のつとめ済で、九時より十二時迄教授する。正午より田中氏え行。法華教研究、葉室伯はしめて来会せられたる。此時俄然驟雨。已而晴たり六時帰。夜大雨。

受信 藤井瑞枝より、あしの一塩とあしの佃煮着。

*あし（鱒） *あし（鱒）

五月二十四日 丁亥 火曜 小雨。

朝の勤行済で、火曜の稽古する。晴雨不定、梅雨（の）如し。

受信 木津跡見より、そら豆着す。

発信 藤井瑞枝え。神代え返書。多田喜子、植村広子え清書出す。

五月二十五日 戊子 水曜 晴。

けふハ空晴渡りて誠に心地よし。朝の勤行済で、当校に中島君の倫理を聞く。午下、西五

軒町河鱒氏を問ふ。川上さま先御出にて、鳥尾氏、甘利氏も御出にて一弦琴の稽古する。晚餐もよはれて、ゆる／＼半日の飲を尽す。

万里伯より京土産の鱧の骨切を頂戴ス、有かたし。

五月二十六日 己丑 木曜 晴。

朝のつとめも済で、佐々木信綱氏を訪ふ。渡辺伯未忘人も御出にて、種々の御咄にて打わろふ事久し。次の木曜日に束記者を呼て、今一度この咄しをくりかへしてと約したり。扇子、短冊をかきおくりたり。

*未忘人（未亡人） *打わろふ（打笑ふ） *束記者（速記者）

五月二十七日 庚寅 金曜 雨。

朝の勤行済で、課業九時より十二時迄の教授する。午下中野より、泰、久々に来り、晚餐を共にして夜八時比迄にて帰。李子、此夕英語塾にて生徒の芝居の催しありて行。十一時比帰。

発信 佐々木氏え花の下道御かしする。木津法専え。土井早苗え。藤井氏え。二見氏え茶豆、いちこ（苺）の御礼状。

五月二十八日 辛卯 土曜 晴。

朝の勤行済で、揮毫ものです。中野より森堯子久々に来り、昨年の茂木の瓦解二付、森氏の負毛いか計か、実に惨たんたる事のみにて其悔みなど申されて、右二付で自分真惣をかきたる一冊子を贈られて、是を汲泉にかゝける約束をして夕景迄咄したり。

*負毛（損亡） *惨たんたる（惨憺たる） *真惣（真相）

五月二十九日 壬辰 日曜 晴。

朝の勤行済で、揮毫ものです。午下早々、高田の馬場津田を訪ふ。久しふりにて畑の空豆、縁豆など子供等摘てもらひたり。三時過より中野跡見え行て、泰、奈良地方にて写生したる風景画十数点を見る。実に凍摩したる工見えて大ぬに感したり。又いち子、そら豆、草花など早苗等取摘て持帰る。七時過帰。不在中、大坂原田来りて絹本静物画一枚を贈る。李子取扱ひたり。

受信 渡辺その子より、いち子着。

*凍摩(鍊磨) 一 *いち子(母) 一 *いち子(母) 一

五月三十日 癸巳 月曜 晴。

朝の勤行済で、九時より十二時迄教授する。正午、大坂石川房子、子供と其守をつれて来る。来客、内田恒子 其姪女と、綾小路晨子 御礼に来る。

受信 唯専寺より、そら豆着、書状と。直に返書。

発信 渡辺そのえ返書出ス。

五月三十一日 甲午 火曜 雨。

朝の勤行済で、火曜稽古する。山田富江来る。昨夜も大雨にて今朝より雨。

(六月)

六月一日 乙未 水曜 雨。

朝、中島徳先生の倫理をきく。津田栄子より電話にて来るといふ。京都御寺御所より、そら豆、縁豆、山椒着にて直ニ返事する。大坂天王寺堂ヶ芝山辺清亮え、すまの松風の返事する。午下、津田栄子来る。夕飯を共にして帰。

*すま(須磨) 一

六月二日 丙申 木曜 晴。

朝の勤行済で、九時より如約、佐々木信綱氏を問ふ。大坂京都の哥人の履歴をきゝたひとの事にて束記者も呼てあり。渡辺後室、藤瀬の細君たちも来られて、先、殿村茂澄、高はし正純、有賀長隣、蓮月、式部などの事ともはなししたり。昼頃迄にて帰。来客、横浜石川徳右衛門細君来りて、房子の子供の熱の有事を聞いて一度横浜え連て帰ると云。夫よりハ今晚の模様にて熱も出なけれハ、明日代々木広岡え連て行事、一番よろしきと申て帰浜ハやめに致し候。御合の物など出して後帰られたり。中野より正子来たる。

*束記者(速記者) *高はし正純(高橋正純)

六月三日 丁酉 金曜 晴。

朝の勤行済で、九時より十二時まで教授する。房子小児二人と女中と自動車にて代々木広岡へ行、一泊ス。六月に入て寒し。袷に綿入羽織といふ、珍らし。

六月四日 戊戌 土曜 晴。

朝の勤行済で揮毫ものス。来客、志賀鉄千代、新田正子。

六月五日 己亥 日曜 晴。

朝、勤行済で、箱書附ものス。正子、石川房子、子供等を(と)帰り来る。昼飯を共にして、予、李子、静子、広橋、自動車にて巖谷小波氏三十年の祝賀会二行。時間之違ひにて無功。資生堂の扇子会二行してみる。また日比谷公園散歩して帰。房子の一行ハ此時三時いよ〜いと間を告て横浜へ帰。

*無功(無効) *いと間(暇)

六月六日 庚子 月曜 陰。

朝の勤行済で、九時より十二時迄授業する。来客、新田成丸。午下より雨ふり出したり。大蔵経要義十巻読畢。

六月七日 辛丑 火曜 晴。

朝の勤行済で、火曜の稽古する。入沢氏著、日本人の坐り方一冊送附二付、直ニ返書ス。大蔵要義十一巻にかゝる。

発信 中村清子、多田よし子え。

六月八日 壬寅 水曜 晴。

朝の勤行済で、揮毫ものス。本多猊下より書至。来ル十七日、当校御構演之事ニ治定ス。午下二時、河はた子え行。甘利氏より一弦琴買請る。三十式円也。日蓮聖人の教義拝読畢。

*御構演(御講演) *河はた子(河鱒子)

六月九日 癸卯 木曜 晴。

朝、勤行済て、終日揮毫ものス。庭の大山木花一ツ咲初る。

六月十日 甲辰 金曜 晴。

朝の勤行済て、揮毫ものス。

六月十一日 乙巳 土曜 晴。

入梅二付小雨。朝の勤行済て、午下一時より地明会ニ詣す。父の三十三年二付、御宝前にて本田日生猥下の読経を願。会員一同も誦経する。講話を伺て後、おつなすし御一同え供養する。五十六人也。此日、内田恒子入会。嘉山梅子も来詣ス。五時比帰。

六月十二日 丙午 日曜 小雨。

晴雨定まらず。朝十時より、予、李子、鉄千代を誘引して自動車にて梅若別会能に行。招待に応して也。此明かた一時半、加茂氏より電話かりて正房危篤と云。直に李子、勝子をつれて自動車にて行。されともはや只イヒキのみにて三時過死去せられたり。李子、朝五時頃帰。実に何と申事そや。人間の不常可驚也、嗚呼。

*加茂氏（賀茂氏）

六月十三日 丁未 月曜 小雨。

朝の勤行済て、九時より十二時迄授業する。午下三時頃より加賀氏え悔二行。万里伯も漸房州より御着ニ相成たり。御暇乞をして帰。今晚、桜ヶ岡の本宅え帰られるはこひ也。いたましき限りなり。予ハ東伏見宮様え御機嫌伺に参りて糸島とのに逢て帰。

*加賀（賀茂）

六月十四日 戊申 火曜 雨。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。本日加茂氏の告別式。此雨にてとても誰も行かれず、李子のみ行。

受信 京姉小路良子様より御書着。朝鮮久岡より孫重雄写真着。

*加茂氏 (賀茂氏)

六月十五日 己酉 水曜 小雨と晴。

父の三十三回忌祭典執行ス。来客、中野泰、志賀鉄千代、鳥尾千勢子。御すもしの供養する。夜八時過まで。今夜万里麟雄様御出。暫時咄して帰られたり。京都より写真御持参。夜の勤行奉仕す。午下早々、墓参して河鱒子へ行。夫より姉小路を訪て帰。五島万千代え写真贈る。

六月十六日 庚戌 木曜 晴。

朝の勤行済て、三重県溝口英郎え色紙出ス。鎌くら荻野え、金子薫園えも。中田菊子、岩田氏、浦月子。月清し。

*鎌くら (鎌倉)

六月十七日 辛亥 金曜 晴。 予記 本日午下一時、本多日生猊下御講話あり、当学校にて。

朝、勤行済て、九時より十二時迄教授ス。一時より本多猊下御来臨。生徒全部に御講話ありて二時過畢。宅え御出にて、恒子、梅子、浦月子ニ御面会にて種々仏法御咄しとも有て、経文のよみ方節つけ等教へをうく。泰、洋画七枚持来りて洋館にかさり付る。岩田来りて、月子、津田栄子、孝行もきたる。夜る八時過帰。

*うく (受く)

六月十八日 壬子 土曜 雨。

朝の勤行済。午下早々、堀田伯常会ニ詣ス。

六月十九日 癸丑 日曜 雨。

朝の勤行済。故重威五年祭ニ付、昼早々自動にて、予、李子、光重つれてはつ御共、雑司ヶ谷墓地にて忍や座敷にて祭典執行。万里、姉伯をはしめ廿五、六人参詣者もありて、賑々しく。後御菓子、折詰等も出たり。墓参して五年間ニ此墓地あき地なき迄に墓出来たり、可驚々々。四時過帰。

受信 本多様より聖訓要義十卷着。山口県藤村源兵衛より白味噌着。

*自動(自動車)

六月二十日 甲寅 月曜 晴。

朝の勤行済で、九時より授業十二時迄。一時に酒井御夫婦様、自動車にて御たち寄にて、予、李、同乗して渋谷桜ヶ岡賀茂氏に行、正房殿十日祭々典に詣す。後茶菓、御すもしの御合のものもありて、又酒井伯と同乗して矢来迄行。伯の御庭其外所々拝見する。実に立派なるものにて驚歎不止。夕餐を共にしてゆる／＼遊ひて又自動車にて帰。此夜、満月光。

六月二十一日 乙卯 火曜 小雨。

朝の勤行済。火曜の稽古する、昼迄。それより揮毫ものス。

六月二十二日 丙辰 水曜 晴。

朝の勤行済で、揮毫ものス。午下二時より河嗜子に行。それより北条子を訪、つね子さま、建子さまも御留守にて帰。夜、葉室伯来る。金子薫園よりたにさく着。

*河嗜子(河鱒子) 　*建子さま(達子さま) 　*たにさく(短冊)

六月二十三日 丁巳 木曜 晴。

朝の勤行済で、揮毫ものス。正午より田中氏へ行、五時帰。京都姉小路良子さまより御申越され候縁談之件、いさ早氏の事、北条建子さまニ書付等渡して、松木氏よりすへて御聞合願度とよく申入候。夜、病後雨宮来る。来客、中野泰も来る。

受信 藤井瑞枝より佃煮着。

*いさ早氏(諫早氏) 　*北条建子さま(北条達子さま)

六月二十四日 戊午 金曜 雨。

朝の勤行済で、九時より十二時迄授業して帰。

六月二十五日 己未 土曜 雨。

朝雨にて。地久節式執行。八時職員生徒参集。李子一寸不在二付、予、勅語奉読ス。君か代と金剛石の唱歌にて式全畢。夫より英語対話、其外練修会あり。みなよく出来たり。会数三十番余あり。十二時全畢。此時より雨晴たり。昼早々より松花会始会相談会、三十人計寄集て種々。此会も今日生れたり。

六月二十六日 庚申 日曜 陰。

朝の勤行畢る。揮毫ものス。正午早々、予、広橋寿子をつれて自動車にて鍋島直大侯告別式に参拝して帰。午下四時過、横田氏来られて洋画をみて、それから種々の談話面白く、暫時にして帰られたり。

六月二十七日 辛酉 月曜 雨。

朝の勤行済て、九時より十二時迄授業する。

六月二十八日 壬戌 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。午後雨にて夜ハ大ぬにふり出したり。此雨、慧星はとても見えない。

*慧星(慧星)

六月二十九日 癸亥 水曜 晴而又雨。

朝の勤行済。午下二時より河鱒子二行而帰。午下五時より、予、李子と帝劇に行。宝塚少女歌劇を見る。みな声にはかんしたり。お夏の物狂ハよく出来たり。舞踊ハ奇麗おとりなしたり。然し所作に田舎見えたる処あり。十一時帰。雨。

発信 山口県藤村、大坂跡見、朝鮮久岡、酒匂藤井え、秋田千田え、羽前岡村え返書出ス。

*かんし(感じ)

六月三十日 甲子 木曜

朝雨、午下晴たり。朝の勤行済。

受信 長崎県田口俊介より掛物着。

(七月)

(七月一日、記載ナシ)

七月二日 丙寅 土曜 晴。

朝の勤行済て、揮毫する。午下一時過より地明会に行。本多師の御講話を聞て帰。此日より浦月子入会せられたり。学校にて小松会面合せありたり。

七月三日 丁卯 日曜 晴。

朝雨ふる。勤行済て揮毫する。午下三時より統一閣へ行。聴講して本多師に対話して此時はしめて皇室中心主義実行団神皇新臣清家中枝二逢ふ。已而帰。

七月四日 戊辰 月曜 晴。83(度)。

朝の勤行済て、九字より十二時迄授業する。中野より泰来る。嘉悦孝子。弥生。
発信 赤坂安川、鎌くら萩のえ、千葉多田え、中の早苗、秋田板谷、牛込金子え。

*鎌くら(倉) *萩の(野) *中の早苗(中野早苗)

七月五日 己巳 火曜 晴。85(度)。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。来客、角田栄子、九条様御使信濃小路。

七月六日 庚午 水曜 晴。85(度)。

朝の勤行済て、九時より十二時迄、学校教授する。来客、中野泰、宮内黙先生。万里伯、堀田伴子様、葉室伯、夜八時過迄。此朝、津田弘視殿来る、帰朝後はしめて面会ス。午下三時過より河鱈子え行而五時帰。

七月七日 辛未 木曜 陰。

朝雨。朝の勤行済て、佐々木氏を問ふ。種々珍ら敷歌かたりありて、十二時比帰。来客、過日統一閣にて逢たる人清家中枝氏来りて面会ス。此人、今晚宇和島え出發すると云のて、

またして書画帖に黄口何知の詩を書て遣る。外に写真も。其悦ひ一方ならず。大く喜悅あふれたり。今晚中元の包物をする。其暑さ譬かたなきほど也。十二時迄。

*またして(待たして)

七月八日 壬申 金曜 陰。

朝の勤行済て、中野泰来る。志賀鉄千代も。予て約したる松野篤義氏、是まで得たる書画幅物を見せたひとて日を治定する、来ル十一日に。中島徳蔵氏に約したる、午下五時より、李子同行ス。同家奥ニ新築したる(以下、記述ナシ)。

(七月九日、十一日、記載ナシ)

七月十二日 丙子 火曜 予記 釈妙園百五十回忌、旧六月八日

朝釈妙園百五十回忌、御宝前にて読経執行ス。火曜稽古ス。本日にして終業ス。

(七月十三日、十四日、記載ナシ)

七月十五日 己卯 金曜 晴。

朝の勤行如例。此日予て約ありて、午下四時中田氏より迎ひ自動車来る。予と李子、歌舞伎座に行。此暑氣にとても堪られないかとあんしたるに此座の涼氣、納涼船の如し。二階にてあせも出ス、うちはも入らぬ位にて、此日の天祐と有かたかりし。曾我野やの一座、久々に面白く、夕食も大めてもてはやされて案外都合よく一日の楽しみ也。

*あんし(案じ) *二階(二階) *うちは(団扇) *曾我野や(廻家)

*大めて(大めに) *入らぬ(要らぬ)

(七月十六日、十七日、記載ナシ)

七月十八日 壬午 月曜 晴。

朝の勤行済。朝十時より堀田伯二行、午下五時帰。

七月十九日 癸未 火曜 晴。88(度)。

朝の勤行例の如し。午下一時より松平鞆子様、御新築落成にて御宝前開御開眼にて北条彝子さま御はしめ、六、七人も御出にて、御宝前読経ありて御主人御夫婦に御めにかゝりて主人公御案内にて御二楷も全部拝見いたし候。御趣工よく御齊ひに相成かんし入たり。五時比帰。あつさ一入にかんしたり。

*二楷(二階) 御趣工(御趣向) *かんし(感じ) *かんし(感じ)

七月二十日 甲申 水曜

朝の勤行漸に済て、臥蓐す。あつさに当られて早速井深氏をたのみて診★(目十察)を乞ふ。時候当りといふ。いつもの腸をわろくしたり。一日絶食ス。

*診★(目十察) (診察)

七月二十一日 乙酉 木曜

此日も臥蓐ス。朝、玄米ソツフのみ。絶食ス。

*玄米ソツフ(玄米ソツプ)

七月二十二日 丙戌 金曜

此日も大ゐに快気ニ及、かゆを食ス。

(七月二十三日〜二十五日、記載ナシ)

七月二十六日 庚寅 火曜 雨。

毎日の雨、梅雨の如し。此日、地方暑中の小包もの拵る、十二軒也。唯専寺、願泉寺、天
下茶屋二軒、石山師前、長尾、酒井伯、安田善次郎、星野二軒、渋沢、賀茂、若間、清水
、観世。暑寒の贈りもの中止する。

七月二十七日 辛卯 水曜 雨。

朝の勤行済て、田村氏画、抜も入れル。雷鳴驟雨あり。午下三時より河鱒氏に行而帰。賀
茂正房五十祭ニ付、水交社にて執行。李子のみ参拝ス。

発信 姉小路良子様、高倉様え暑中見舞文出ス。

*抜も入れル(一跋も入れル) *五十祭(五十日祭)

七月二十八日 壬辰 木曜 晴。

はしめて雨晴たり。朝の勤行も済て、田村氏画帖もの仕上る。来客、土井早苗、万里伯。

(七月二十九日、記載ナシ)

七月三十日 甲午 土曜

明治天皇御例祭。御宝前にて読経奉読する。

*御例祭(御霊祭)

七月三十一日 乙未 日曜 雨。

朝の勤行済。来客、中野の正子、早苗、神代鶴子も不二の画幅物もち帰。明一日帰神のよし暇乞にくる。李子、朝より俄に気分あしくて熱九度五部ト云。早速、井氏を呼て診★(目十察)する。時候あたり。腸をあしくする。

*九度五部(九度五分) *診★(目十察) (診察)

(八月)

八月一日 丙申 月曜 晴。

朝の勤行済。午下四時より有約、鳥尾子え行。甘利氏連中にて三弦、琴曲、一弦琴、尺八合奏会也。九時帰。

受信 善光寺大本願智栄様よりあんすの罐詰一打着。

*あんす(杏子)

八月二日 丁酉 火曜 晴。

朝の勤行済。来客、麟雄師。

発信 善光寺智恵尼公え返書ス。

(八月三日〜七日、記載ナシ)

八月八日 癸卯 月曜

水戸後藤専之輔氏より火事在て電報にてキノフウチヤケタと云。今朝、のり重出立ス。

*のり重(憲重)

八月九日 甲辰 火曜 予記 六十三号汲泉出来。

(八月十日、記載ナシ)

八月十一日 丙午 木曜

毎朝勤行例の如く。十一日の朝はしめては書を見る。水戸後藤の家内より火出しにて二むね焼出ス。家内みな留守中のよし、着のめ着のまゝと云。夫より、予、李子、着ものを引出して子供たちのハ買求めて大急ぎにて縫たれとも、九人の間ニ合かねて、先々十一枚、其外、帯、襦半、下のものあらゆるものこしらへて一合利調ひたり。

*焼出(焼失) *は書(端書) *着のめ着のまゝ(着の身着のまゝ) *襦半(襦袢) *こしらへて(拵へて) *合利(行李)

八月十二日 丁未 金曜

今朝小包物ニして水戸後藤専之輔氏え出ス。のり重、今に帰京なし。此日、日光行思ひ付て、夜る旅行の準備する。

発信 日光御用邸花松様あてにて献上もの出ス。

*のり重(憲重)

八月十三日 戊申 土曜 晴。暑甚。

朝の勤め例の如し。この暑さに一度日光え出て見たいと李子申出して、愈今十三日一時四十分の汽車の筈にて俄然準備する。午前十時より田沢博士の体操式終了ニ付体操をみる。

昼餐会もあるといふ。午下早々上野へ行。此行、予、李子、静子の三人也。先、日暮里、田畑と進行して心地よし。后七時過日光着。神山より迎ひ来りて安着す。此夜月清し。月に相對して臥。

*体繰式(体操式) *体繰(体操) *田畑(田端)

八月十四日 己酉 日曜 晴。

朝の清涼、単の重ね着と云。水ひやゝかにて手もつけられぬ。此日、御幸の神山より電車にて馬返し迄、夫より車にて般若、方等、華嚴瀑をみる。幸湖中宮祠薦やにて昼食ス。大火後にて風色一変す。帰途、裏見の滝をみる。この道路ハ何処迄も平坦、陛下の御転法輪を転せき(衍)られたる故、御徳の有かたき、自動車、人力車にて楽々と易行せらるゝ。五時頃神山に帰る。月清し。

*薦や(つた屋) *平坦(平坦)

八月十五日 庚戌 月曜 晴。

朝の勤行済て、李子、静子ハ朝八時より霧降滝に行。予ハ九時前より御用邸に参る。御門もさし支なく御玄関より御案内に大奥え参る。花松典侍様御目にかゝる。陛下には久久、此暑さに参りたる二付、拝謁仰付られる。御座所御前近く陛下御満足さまにて、年寄かこの暑さによく参りたるとて親しく御意を蒙る。何くれと仰事ありて皇太子の御上の事共やら、はた日光道路の改善の事なども申上、花蹊ハ写真は御どうやと仰せられたるに、是も結構ですと申上たれハ、それでハ写してやると仰せられ、誰か御側の御人かと存したれハ、わたしが写してやると仰せられて、写真器を持せられて御庭えこひと仰せられて、御庭所のよき位置をとらせられ、樹陰のよき御場所て立て居る処と、今一枚石に腰かけたる処を、大原をよへと仰せられて、大原内侍と石に腰をかけてそれを移していたゝき、其時、親王澄宮様八十時に成らせられ(衍)るゝを例と遊はされ、澄宮様に拝謁仰付られ、皇后様には澄宮様にこれハ跡見花蹊と申て今年八十二歳にて此人ニ御あやかに御成のやうと仰せられて、澄宮様ニは、わたしも花蹊を写してやると仰せられて、御写真器をもたてられて写して戴き、此日は何と申たる事にや、全く神わざと存上候。て感涙の外無之候。やかて十一時頃に御いと間申上て、陛下より御目録五千疋、御すきや明石の御反物、短冊箱、筆筒とを、御菓子等をいたゝきて下る。今日は淑光浄土の境界に登りたり。この御座所の

御庭ハ御前ハ草花、薄、女郎花、桔梗など咲出たるに、御流れの清きに奇石、御灯籠など位置よく、脊景はみな山にて赤薙山とか、実に御庭の結構なるに出御ありて此処にて御撮影を遊ばされたり。此日三時三十五分発汽車にて上野八時着。久喜にて静子居なくなりて心配一方ならず。久喜より三停車にて漸見付かりたり。大安心。

*移して(写して) *もたてられて(もたせられて) *いと間(暇) *御す
きや(御透綾) *淑光浄土(寂光浄土) *脊景(背景) *赤薙山(なき)
*御灯籠(御灯籠)

(八月十六日、十七日、記載ナシ)

八月十八日 癸丑 木曜 雨。

朝の勤行済、揮毫ものス。午下五時頃より京都竹田うの来る。夕飯を共にする。九時頃帰。満月清し。

八月十九日 甲寅 金曜 雨。

朝、例の如し。午下三時頃より甘利氏はしめて来る。一弦琴の稽古する。夕飯共にする。八時頃車にて帰ス。

八月二十日 乙卯 土曜 晴。

朝の勤行済で、揮毫ものス。来客、中野より正子、昼飯を共にする。四時帰。

八月二十一日 丙辰 日曜 晴。暑甚。予記 駿ヶ台土井早苗え行、約束あり。

朝の勤行済で、小田原閑院宮妃殿下え文さし出す。此朝、李子日月会え悔みに行て帰。午下五時より土井氏え行。早苗子待請られ、いつもよく掃除万端、床飾注意せられ、伊勢忠料理にて美味究められたり。ゆるくと食事済て何くれと咄しに長して九時比帰。万里通としさま御出也。此夜、帰宅後一寸雨ふる。已而止。此夜の夢に、予一人にて夜半後旅をする。右え行ては西に、又右え行ては西え行く。とうとう行つまりたる処に、法華多宝如来と日蓮聖人様とに目のあたり押し、如来ハ大なる銀の錫杖を持たせられ、聖人ハわらしばきに管笠を持たせられて、私思ふ、今世にて十方衆生の為にかくも御苦勞遊していた

くくかと存して有かた涙に感泣して夢さめたり。生たる多宝如来、日蓮聖人様に御目にかゝるとは何たる吉夢なるや。

*究め(極め) *わらし(草鞋) *管笠(菅笠)

八月二十二日 丁巳 月曜 晴。88(度)。

此吉夢のまゝ起て、朝の勤行いたしたり。此日、午下五時より幡ヶ谷二二八番地新築養禽会社にて星野錫君渡欧ニ付送別会ニ会ス、李子も。予ハ時刻遅れて七時過ニ至る。門前にてみな写真撮影する。鳥の戸や幾百数も出来て盛也。楼上にて星野氏渡欧の労働問題の用逮をのへられたり。食事、新橋竹川町の博多料理にて頗美味也。九時頃畢而星野氏の自動車にて帰。

*鳥の戸や(鳥屋) *用逮(要術)

八月二十三日 戊午 火曜 晴。89(度)。

朝、勤行例の如し。

八月二十四日 己未 水曜 晴。88.5(度)。

朝、李子、静子五時出発。五時半、両国汽車にて房州へ行。朝の勤行例の如し。揮毫ものス。

八月二十五日 庚申 木曜 晴。八十八、五(度)。

朝の勤行済て、揮毫ものス。午下三時より河鱒子へ行。稽古して夕餐を呼れて帰。李子、静子より無事着房のは書着。此夜更て月清く、昼の如し。小田原閑宮様より御文着。

受信 斎藤仁子より青なす着。植竹氏より鮎着。

*は書(端書) *なす(茄子)

八月二十六日 辛酉 金曜 晴。

朝の勤行済て、揮毫ものス。安祥堂の鼠あはれて本をかちる。大掃除する。三時頃俄然夕たちス。雨晴て、

木々はみな夕たち雨にあらひ上て清くすゝしきにじのかけはし

実地空に候。夜半月きよし。

*あはれ(暴れ)

八月二十七日 壬戌 土曜 晴。風。

朝の勤行済。また俄然雨ふり出したり。俄然清涼。

八月二十八日 癸亥 日曜 晴。

朝の勤行済で、揮毫ものス。雨後頓涼。襦半、セルト云すゝしき。今晚、李子より電話にて、五時房発にて夜八時着、自動車をおこせと云。右之通、八時に自動車両国え遣ス。九時漸着。大せいにて、とても荷物困難のよし。のり重と下部と迎ひに行。宜しかつた。李子、静子無事帰着ス。

斎藤善子、昨廿七日死去知らせあり。

*襦半(襦袢) *のり重(憲重)

八月二十九日 甲子 月曜 雨。

終日細雨降り通したり。極々静かなる雨也。朝の勤行済で、終日揮毫ものス。

八月三十日 乙丑 火曜 晴。小雨。

朝の勤行済で、揮毫ものス。李子、朝熊谷斎藤氏え悔みに行、八時帰。午下小雨。発信 小包物七軒え出ス。

八月三十一日 丙寅 水曜 晴。予記 斎藤善子葬式、午下二時。

朝の勤行畢る。午下一時より村井氏を問ふ。吉兵衛氏夫婦にも逢ひたるに、思ふたよりハよほ(と)健康上よろしき、面会して大るに安心々々。夫より閑院宮様を伺ひて、御息所に拝謁して何くれと御咄し申上候。九月三日ニは愈殿下御機嫌よく還御在らせらるゝにニ(衍)付、三日午後二時迄に参殿の事仰せられ候。夫より阪本氏え行、一弦琴の稽古ありて帰。八時過也。

(九月)

九月一日 丁卯 木曜 晴。

朝の勤行済。式百十日。やく日なから好天気にて熱さも八十度位にて極静に清暑なり。

夜も清涼。天神も喜び給ふらむ。東京市長後藤男より招待状、本月八日、皇太子殿下ノ御帰朝奉祝会ヲ日比谷公園に挙行、同日午前八時御来会をと云。来客、津田栄子。

*やく日(厄日)

九月二日 戊辰 金曜 晴。

朝の勤行すむ。李子、朝より津田と中野へ行。午下三時半比より俄雨驟雨の如し。雷鳴もありて其雨のはけしき勿にして、往来川をなし、人の足節迄に洪水となりてたちまち床下迄になる。電車通りハたゞみも上ると云さわき。却而この柳町の方ハましてある。六時比より雨止たり。間も(なく)水の引も早くなる。此時、大沢亀子きたる。水道橋にて電車止而通りかゝりの車にて無理に乗ってきたと云。八時頃、李子無事に帰る。晴天、星も出て空清し。邪払、清めの雨也と天の御加護を押し奉る。此日ハ土地の災のあるを天ハ雨にてしりどけられたると。

*勿にして(忽にして) *たゞみ(曇) *ましてある(ましてある) *しりどけられたる(しりぞけられたる)

九月三日 己巳 土曜 予記 午後早々、閑院宮え参るへきよし仰られたり。

本日、皇太子殿下、閑院宮殿下、御帰朝に御坐候。三月三日より天神地神を願ひて今日迄待上たるに、今日となりてこの嬉しさ何に譬ふへきや。早起して朝の勤行ス。長き間の御加護を仰き奉りて祭典厳にいたしたり。又閑宮様より十二時半に参る様、妃殿下より仰せられる。学校ハ奉迎の為、李子、生徒等ハ芝増上寺山門前にての事。昼飯早々、閑院宮様え参殿ス。二時頃殿下御還御なる。久々にて拝謁する。御雄姿少しも御変りなく嬉しさに感泣する。花蹊もいつも気丈で結構だと仰せられる。皇族様かた、となた様にもつゝいて御挨拶に御参りになりてみな拝謁ス。夫より御餐御陪食ス。御客は黒田様御夫婦様、三条千よ子さまと御供いたしたる人と私と也。実に御陪食の有かたさ限りなし。四時過退出ス。

九月四日 庚午 日曜 晴。

朝の勤行ス。午下、雨降り出し雷鳴もはげしく、其内表ハ水量多く、川渡りするうち、雨晴て水も引きたり。

九月五日 辛未 月曜 晴。

朝の勤行すむ。此日も折々雨降り出したり。梅雨の如し。夕景より甘利氏来りて稽古する。加茂とみ子と秋江氏と来りて、桜ヶ岡ハ洪水にて帰宅出来スとて一泊す。

*加茂とみ子（賀茂とみ子）

九月六日 壬申 火曜

学校始業式執行。朝八時、職員生徒一同講堂に集り、始業式執行ス。構長の始業の講演済て、主事、皇太子殿下御渡欧ニ付ての御見学其他の御事委しく演舌せられて式全畢。此日も度々雨ふる。又晴渡りたり。

*構長（校長） *皇太子殿下（皇太子殿下） *御見学（御研学）

九月七日 癸酉 水曜 雨。

朝の勤行済。十時過より雨ふり出したり。夜半よりの豪雨盆を覆したり。度々起て見る。又止てはまたふる。是雨は神秘的て明日の奉祝会に逆徒の入込あるを察したり。天神地神を祈る。

九月八日 甲戌 木曜 予記 皇太子殿下奉祝会、日比谷にて、午前八時。

四時起て、朝の勤行も済て、七時半出門の準備する。然し雨は益つよくて約束の増田氏より自動車来る筈ながら、この七時八時の雨にては増田氏困難思ひやられ（ママ）と思ひて御断する。皇太子殿下、九時日比谷出御之時、雨晴、天晴朗風もなく日本晴と相成たり。有かたき事、譬へかたき事也。神秘なる哉々々哉。

九月九日 乙亥 金曜 晴。冷。予記 地明会、午後二時より。

朝の勤行すむ。授業昼迄二畢。皇太子殿（下）、今朝御西下あらせられる。伊勢と大和神武陵、桃山え御報告に成らせられる。午下一時より地明会に集る。御講和を聴聞して帰る。

五時也。

*御講和 (御講話)

九月十日 丙子 土曜 晴。

朝の勤行すむ。この朝閑院宮様より御使者千国氏来よ (ママ) り、宮様御帰朝の御土産とあらせられて、御紋章タイヤ入の帯あけ金製一箇と、仏国の香水三瓶と御下賜相成。有かたき事也。四時より、予、李子と帝劇見物する。森氏よりの招待なり。帝劇行。恋の信言と極楽の鬼、かんたんと丈也。面白し。

*御紋章タイヤ入の帯あけ (御紋章ダイヤ入の帯留め) *信言 (伸玄) *かんた
ん (邯鄲)

九月十一日 丁丑 日曜 晴。すし。

朝の勤行済で、午下一時より閑院宮様へ御礼に参る。両殿下に拝謁して御渡欧中の御咄し共うかかひて有かたき事也。已而退出す。夕景、斎藤仁子、嘉山梅子来る、十時過迄。

九月十二日 戊寅 月曜 雨。

朝の勤行済で、八時廿分授業、十一時半済。

九月十三日 己卯 火曜 晴。

朝の勤行済で (以下、記述ナシ)。

九月十四日 庚辰 水曜 雨。

朝の勤行済。

受信 藤井瑞枝より、つくたに着。

*つくたに (佃煮)

九月十五日 辛巳 木曜 先々陰。予記 佐々木氏行。

朝の勤行済で、佐々木氏へ行。暫時にして帰。日光御用邸へ文さし上る、小包と。

九月十六日 壬午 金曜 晴。

朝の勤行済で、午下早々、二荒伯爵氏え始て伺ふ、飯田町三ノ四番地に。早速、広子御夫人に御目にかゝりて学校より懇願にて、此度、皇太子殿下の御供奉にて御渡欧の御模様、御感しになりたる事共の御講話願上、御不在ニ付御夫人様え願置候。已而帰。広子女王も御子さま御二方も御出来になりて誠に結構々々と存候。帰途、河鱒子え立よりたり。御不在にて帰。今夕ハ仲秋明月にて、一点の雲もなく晴わたりて珍らしき夜也。夜更てもますく月影の清らなるにまた枕を離れて月にあこかれたり。

九月十七日 癸未 土曜 晴。

朝の勤行済で、揮毫する。いさ宵の月も清くて、哥に夜明したり。

九月十八日 甲申 日曜 雨。 堀田氏行。

朝の勤行済。けふハよき晴にて徒歩のつもり処、また雨ふり出したり。午下早々、堀田伯え行。五時帰。此夜は大豪雨ふりては止、またふり通して幾度となく雨晴不定。

九月十九日 乙酉 月曜 予記 日本美術協会開館式、午下二時。

朝の勤行済で、学校え出る。昼前済。此日も雨にて美術協会不参する。日光御用邸花松典侍さまにて御書着。

九月二十日 丙戌 火曜 晴。80(度)。

朝の勤行すむ。本日ハ珍ら敷晴。彼岸の入。天気にて嬉しき。火曜稽古はしめ。白山祭事にて朝より神輿三体門前に集る。

九月二十一日 丁亥 水曜 極上々の晴。

昨夜一睡りもなくて夜ハ明たり。朝の勤行すむ。今朝電話にて、伯爵二荒芳徳君より、御依頼により廿四日午前九時来校のよし、申越れたり。

九月二十二日 戊子 木曜 晴。

朝の勤行すむ。

九月二十三日 己丑 金曜 晴。

朝の勤行済て、授業昼前迄。

九月二十四日 庚寅 土曜 予記 二荒伯招待あり。御講話午前九時に。

九月二十五日 辛卯 日曜 雨。

朝の勤行済て、午下早々閑院宮に詣して、両殿下に拝謁仰付られ、此度御渡欧之御大役に付せられて菊花大飾章御拝戴之恐悦申上て、御前にて此御章拝見ス。実に御立派なる御品にて、此上の御賞ハなく、是か極々の御とまりのよし飼て、御名譽是に過たるはなき御事也。しはらく御咄し申上て、拝辞して二荒伯え参り、芳徳様、広子殿下にも御目にかゝりて、昨日の御礼申上て帰。

*飼て(伺て)

九月二十六日 壬辰 月曜 晴。予記 遠足日。天気危険ニ付中止ス。

昨夜より豪雨度々にて遠足日中止ス。皇太子殿下箱根へ行啓。夜明て五時頃より晴天となる。予、学校え授業す。此時御所より御使にて、皇后陛下御撮影のわか写真二枚と澄宮殿下御撮影之分と御下賜仰付られたり。花松典侍御文にて種々承る。有かたき御沙汰共にて、身の幸栄何に譬へんとかしこまる。花松典侍さまより日光御土産物種々戴く。

*危険(危険) *わか写真(我が写真) *御沙汰(無沙汰) *幸栄(光栄)

九月二十七日 癸巳 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。

九月二十八日 甲午 水曜 雨。

朝の勤行済て、揮毫ものす。午下より河鱸子に行て、甘利氏も来られて稽古する。夕飯を呼れて帰る。此時、安田善次郎氏刺客の為に殺されたりと云。誠としもおもはれすと云うちに夕刊来る。安田翁殺害正報、廿八日、大磯の別邸にて朝日平吾労働者至、寄金を強請

しつゝ此刃場に及んだのであるといふ。実にいたましき事限りなし。

*刃場(刃傷)

九月二十九日 乙未 木曜 雨。

朝の勤行済て、佐々木氏を問ふ而帰。午下早々、横あみ安田氏え悔みに行、死体暇乞をし
て帰。善三郎氏、輝子ニも逢ふ。外の人は一人も居らず。焼香をして帰。

*横あみ(横網)

九月三十日 丙申 金曜 雨。

朝の勤行済て、授業して昼前帰。

(十月)

十月一日 丁酉 土曜 雨。

朝の勤行済。此日、万里家くわ女来る。夜、甘利氏来る。午下十一時より始而下田次郎博
士御出にて、五年生ニ女子に関する御講話ありて結構ニ聴聞する。毎週土用には御出校の
事願ひたり。

くわ女え御召、呉服、中形縮緬の下着と一重ねを生かたみとして贈る。

*土用(土曜)

十月二日 戊戌 日曜 陰。

朝の勤行済て、此朝、李子、安田氏ニ告別式に行て帰。夜、玉枝来る。雨ふり出したり。
受信 京都侯野氏より見事なる松たけ一籠。三宅童子より、ズイキ、長なす、萌荷の花。

*長なす(長茄子) *萌荷(茗荷)

十月三日 己亥 月曜 雨。 予記 三日午後一時、浅草法話会。

朝の勤行済て、授業十二時まで。来客、新田きく、千とせの七年祭二付、志のもの持来る。

十月四日 庚子 火曜 先々晴。

朝の勤行すまして、火曜の稽古する。夕日もよくなりて明日の遠足ハ大丈夫なり。突然号外にて、陛下御重体、御快気あらせられすと云。大々驚愕。葉室伯え電話懸る。万里伯に申ス。陛下の御重体に御かけ付になりたるかと問ふ。万里もと秀、内膳司にてこゝに御出にて、今日御昼も御常の通り召上りたると云。それより九条公えも聞明したるに左様の事ハなきとて、明朝参内にて伺ふと仰せられたり。

十月五日 辛丑 水曜 晴。 予記 遠足会。美とり会。

今朝は珍ら敷晴にて、五時より拵に準備して七時出門して、当日房州鋸山に遠足すると云。予ハ心も心ならずやめる。一行の無事と天氣を祈る。午下一時みとり会二行、四時帰。遠足会と(の)一同無事、七時半帰。

十月六日 壬寅 木曜 雨。

朝の勤行済て、佐々木氏え行、暫時にして帰。

十月七日 癸卯 金曜 雨。

朝の勤行済て、学校出勤昼十二時。来客、麴町永田町渡節子。

十月八日 甲辰 土曜 雨。 予記 午後一時半より地明会。

朝の勤行済て、午後一時より統一閣に参る。地明会にて、陛下の御違例御快方御祈祷之読経ありて後、御講話済て帰、五時。夜、甘利氏来る。

十月九日 乙巳 日曜 雨。 予記 若菜会、如水館にて、午下一時より。

朝の勤行如例。午下一時より如水館二行、若菜会二回也。はじめて如水館をみる。建築もすべて趣工をこらしたるに結構々々。此会ハ別に余興もなし。食堂ニ入て洋食済て、広間にて相互に咄して一同名前を書入ル。四時帰。此日は雨不止、夜通し風も交りて、実ニ暴風雨にもなるかとあんしたり。

*趣工(趣向) *あんし(案じ)

十月十日 丙午 月曜 雨。

朝の勤行済で、学校授業十二時迄。

午下四時頃より雨止たり。閑院宮様より御使千国氏来りて十六日午餐会之御招待を下される。拝答する。

(十月十一日、記載ナシ)

十月十二日 戊申 水曜 晴。

十月十三日 己酉 木曜 予記 新田千歳の七年祭祥忌。

朝の勤行例の如し。如約、津田栄子来。同道にて佐々木氏を訪ふ。栄子、和歌の入門を願ひ、種々和歌に付ての御咄しも有て帰。昼飯を共にして帰。藤娘、踏絵、和歌百話。

十月十四日 庚戌 金曜 晴。

十月十五日 辛亥 土曜 大晴天。 予記 午下一時より音楽会。

朝の勤行済で、浦四三子来りて、予、李子と自動車て十一時半より安堂幸子を誘ひて帝劇に行。愈一時音楽始まる。見所の見事なる奇麗なる実立派なる事也。ウワイヲリン幸子、ヒヤノを聞に実に妙手、感し入たり。次に独唱鈴木信子三回、安藤幸子ウワイヲリン伴奏、ヒヤノシヨルツ氏。洋楽済て日本楽、伊十郎、杵屋のもとり橋、勸進帳見事也。無事大盛会、三時済。

*ウワイヲリン(ヴァイオリン) *ヒヤノ(ピアノ) *ウワイヲリン(ヴァイオリン)
*ヒヤノ(ピアノ) *もとり橋(尺橋む)

十月十六日 壬子 日曜 晴。 予記 閑院宮殿下正午十二時午餐え御招待戴候。

朝の勤行済で、十一時より閑院宮え詣す。其内御客方続々御揃ひにて、十二時正餐御培(陪)食結構、みな御近ひ御親戚、御兄弟様にて。御餐後、此度皇太子殿下御渡欧の活動御写真拝観する。是皇太子殿下御手元にて外にてのとは違ひ至極結構。宮殿下御説明被

遊。われらも供奉員の心地して勿に五ヶ国を見物いたしたり。

*御培食(御陪食) *勿に(忽に)

十月十七日 癸丑 月曜 晴。

神嘗祭休業。朝の勤行済て、揮毫ものス。夕八時、岩田氏来る。夜十時半、松島夫婦広島より着。李子迎ひに行。

十月十八日 甲寅 火曜 晴。 予記 堀田伯行。

朝の勤行済て、火曜の稽古する。午下、徒歩して堀田伯へ行。帰り万里さまえ寄、暫時にして帰、徒歩にて。

(十月十九日、記載ナシ)

十月二十日 丙辰 木曜 陰。 予記 廿日午下二時より婦人育児会、如水会にて。

朝の勤行済て、揮毫ものス。津田栄子同道にて、佐々木氏を問ふて帰。眼鏡をそにねて本郷辺眼鏡やえ行、つくろはせ、新に調もしたりして帰。此時少雨。夜も雨の音聞たり。来客、万里通年さま、嘉山梅子、斎藤辰子縁談究りて御暇乞に来る。来客、川越より久野冬扇米寿。

*そにねて(そこねて) *究りて(極りて)

十月二十一日 丁巳 金曜 雨。

朝の勤行済て、九時より十二時迄教授。終日の雨にていつも真くらにてかきもの出来す。

受信 原田富士子より松茸一籠、大坂中之島四丁目。

*いつこ(何処) *真くら(真暗)

十月二十二日 戊午 土曜 晴。 予記 午後七時より牛込原町常楽寺ニ、電車通り柳町停留所より半町。

朝の勤行済て、揮毫ものす。下田治郎氏講話を聞。午下揮毫ものス。大崎町三条資君様より来ル廿八日午後五時迄に、閑院宮両殿下御晚餐に御招待ニ付、私も御まきに相成候ニ付

御請申上ル。

*御まき(御まねき)

十月二十三日 己未 日曜 雨。

朝の勤行済て、揮毫ものス。此日、松島夫婦来る。夕飯を出す。親しく物語りなどして八時過、中野え帰。

十月二十四日 庚申 月曜 陰、少雨。

朝の勤行済て、帝劇、松島夫婦の為に招待す。予、李子、中野寿子、早苗、津田栄子も見物ス。

十月二十五日 辛酉 火曜 晴。 予記 茂房五時三十分発にて帰国。中天停車場迄みな送る。

朝の勤行済。来客、松島茂房、端子。火曜の稽古する。

*中天停車場(中央停車場) *端子(靖子)

(十月二十六日、二十七日、記載ナシ)

十月二十八日 甲子 金曜 晴。 予記 大崎町三条様午下五時迄。

朝の勤行済て、金曜の教授昼迄。四時より自動車にて三条家御新築に参る。千代ヶ崎と云地明て資君様御案内にてすへてを拝見する。実に広大なる御建築にて驚き入たり。やかて閑院宮両殿成らせられる。外二男三条、河鱒子、藪子とおのれにて、宮様御供に御掛夫人、松井増にて、御座敷にて薩摩琵琶二曲、夫より御楼上にて御食事に相成。校書、御酌七人計にて踊も有て御盛宴也。九時還御。おのれも退出ス。

*地明(地名) *両殿(両殿下)

(十月二十九日、三十日、記載ナシ)

十月三十一日 丁卯 月曜 晴。 予記 外務大臣内田康哉、政子霞ヶ関離宮にて園遊会、

午時二時半より。

朝の勤行済で、午下二時より予、李子と自動車にて霞ヶ関離宮に参る。天長節御園遊会にて御庭苑の秋色実結構。御余興場も有て陶器焼もの場所、大困雑にて、五、六器をかく。食卓に付て種々食事、畢而暫時遊ひて退散する。五時過也。

*大困雑（大混雑） *かく（描く）

（十一月）

十一月一日 戊辰 火曜 晴。

朝の勤行済で、火曜の稽古する。松島端子来りて一泊す。ゆるくと物語りする。種々なる物餞別して、器物類不足のよしにて、さかし物して、先々久々のはなもして臥

*松島端子（松島靖子） *さかし物（探し物） *はな（はなし）

十一月二日 己巳 水曜 晴。 予記 二日午後五時、築地精養軒、奥八郎兵衛。

朝、中島氏講演を聞く。終日揮毫ものス。午下四時半より、予、李子と精養軒に行。始、余興、講談、吉村伊十郎氏連獅子とにて、後、食堂開かれて八時過済で帰。朝早く、靖子中野え帰。

*吉村伊十郎氏（芳村伊十郎氏）

十一月三日 庚午 木曜 晴。 予記 五年生修学旅行、夜十時半。

明治天皇祭、神前祭執行す。津田栄子来。同道して佐々木氏え行、暫時にして帰、昼餐を共にして。浦四三子来る。依田耕一、於清夫婦、御礼に来る。本日夜十時半発汽車にて、五年生修学旅行出発ス。同勢百廿人余。好天気にて月も明らかにて実に羨しいほと也。みな生々と出立ス。

十一月四日 辛未 金曜 晴。

朝の勤行済で、揮毫ものス。午下七時廿分、東京駅にて、原総理大臣改札口に赴かんとす際、突然群衆中より青年現はれ出て、短刀にて胸部を刺したので首相ハ其場に昏倒せら

れた。各大臣、高官等ハ事の意外に非常なる驚きにて、首相を駅長室に運び、医学博士等四名も呼び来りたれ(共)、其まゝ御落命のよし也。実に此号外に驚きの肝をつふしたり。

*つふしたり(潰したり)

十一月五日 壬申 土曜 晴。 予記 午下七時、常楽寺。

朝の勤行済て、九時頃より、予、津田氏を問ふ。夫より中野え行て正子の病を問ふ。少し快方の模様にて先々安心いたし脊中いたみ所を一心によくさすりて先々看護する。それよりまた引返して津田え行。夕飯を呼れる約速にてゆるく夕飯を呼れて七時迄。牛込平楽寺え参りて帰。

*約速(約束) *平楽寺(常楽寺)

十一月六日 癸酉 日曜 晴。 予記 午前十時より帝劇にて、大学邦楽部。

朝の勤行済て、絹本一枚揮毫ス。帝劇音学会ハ止て、井上、朝倉替りに行。原氏の遠慮にて。

*音学会(音楽会)

十一月七日 甲戌 月曜 晴。 予記 七日午後四時、上野精養軒え、石井菊次郎。佐藤信郎長女静子、養子重一と結婚披露会、築地精養軒、午下五時。朝七時発、津田栄子、弘英連て香港え出立。

朝の勤行済て、津田栄子、英と共に看護婦を連、七時半出発香港え行。東京駅迄送る。それより原様え御悔に行。今政友会本部え移すと云時にて、御棺の蓋をすと云時にて御暇乞も出来たり。御顔も極柔和に見えたり。御焼香も上て夫人にも逢て御悔み申上たり。夫より横田氏を訪て縫子に逢ひ、種々悲歎の物語りして帰。新田えよる。石井皆子の結婚式に行。余興たけ済して、佐藤信郎氏静子結婚に会して十時帰。

十一月八日 乙亥 火曜 晴。

朝の勤行済て火曜の稽古する。午下、揮毫ものス。

十一月九日 丙子 水曜 晴。 予記 斎藤辰子結婚日。

朝の勤行済て、七時修学旅行の五年生、及職員一同無事帰校ス。午下六時より、予、李子と築地精養軒ニテ、渡辺音次郎氏と斎藤辰子結婚披露会ニ行、八時帰。

十一月十日 丁丑 木曜 晴。

朝の勤行済。来客、斎藤仁子 十二日約ス、葉室伯。

十一月十一日 戊寅 金曜 晴。

金曜教授ス。

十一月十二日 己卯 土曜 晴。 予記 斎藤氏里開会。

朝九時より嘉山梅子自動車にて迎ひ来り、予、李子、高子を連れて上野停車場へ行。仲人藤田細君、下瀬房子、後藤、音次郎夫婦、其外兄様夫婦も同行。天気もよく実に小春日和にて晩秋の野景最よく、面白く咄しなから、熊谷本斎藤え着。祝義式事済て、昼餐も結構。隣家蔵之助方えも訪問す。主人夫婦も病人にて実に氣之毒、何とも言はん方なし。本日よりこの夫婦病氣全快祈禱する。夜八時頃帰着す。

十一月十三日 庚辰 日曜 晴。

朝の勤行済て、午下(以下、記述ナシ)。来客、片岡君子、久々にて。横田縫子より美味なる手料理到来ス。

十一月十四日 辛巳 月曜 晴。 予記 地明会。

朝の勤行済て、授業十二時迄。午下一時半より地明会に集る。本多猷下の講話聴聞して夕景帰。

十一月十五日 壬午 火曜 晴。 予記 観菊会。

朝の勤行済。火曜稽古日にて昼迄。赤坂離宮、観菊会召されて河鱒為子さまも同行を頼まれたるにて、自動車申付たるに、二時に成て同車破欠いたして俄に車にて河鱒子へ行。為子さまも同行す。離宮御苑のすへてか、実に何とも称え事も得も言へぬ結構。紅葉のよく染尽して是や極楽浄土というへきか。御池所々に有て、先々この秋の麗しき氣色にあこか

れて菊花壇拝見す。数も多く工みに造られたり。三時半比、后宮陛下、皇太子殿、皇族、閑院宮さま御はしめ、みな御夫婦様御随行。拝謁して食事付、この食堂其広きに見わたしきれぬほど、五千人とか。其内、陛下、皇太子殿下、外様、御還啓あらせられて我々も退出に付く。この御気色跡にして、いかにも残心々々の到り也。此時満月、杉と紅葉の間より御登りの時にて、あたかもよし、夕陽と満月にて有かたしとも言葉はない。

十一月十六日 癸未 水曜 晴。 予記 小とみより三味線出来。

朝の勤行済で、昼早々、閑院宮様え参る。殿下には大演習二付、二時より横浜本牧原氏御宿仰付られたる、成らせられる。御息所様とも拝謁して種々御咄し申上で、それより河鱈子え行。此時、尺八の人神久雄氏来られて、三曲、四曲にて面白き事。夕飯も呼はれて八時帰。斎藤仁子来る、十一時まで。

十一月十七日 甲申 木曜 晴。 予記 本多師講演会。

朝の勤行済で、佐々木氏え行て帰。揮毫ものす。午下一時半、本多猯下御出にて講堂にて御講話あり。済てわか宅にて暫時咄して帰られる。

*わか宅（我宅）

十一月十八日 乙酉 金曜 晴。 予記 堀田氏常会。

朝の勤行済で、本日より十時より授業にて、午下一時五分迄となる。十分より堀田氏常会二行。北条つね子さまいまた御所旁にて欠席。四時過帰。

十一月十九日 丙戌 土曜 晴。

朝の勤行済で、下田次郎氏の講話を聞く。此夜、甘利氏、斎藤仁子来る。仁子、一弦琴の入門する。李子もすゝめられて門に入る。

十一月二十日 丁亥 日曜 晴。

朝の勤行済で、午下一時より統一閣に参詣する。祖師御工式。先僧呂御読経済で講話、陸軍中将宮岡氏、次二本多猯下講話。実に有かたき事也。日暮て帰。

早川定一より鴨一番着。

*祖師御エ式(祖師御会式) *僧侶(僧侶)

十一月二十一日 戊子 月曜 陰。

朝の勤行済。十時より一時五分迄教授ス。特別大演習、十六日より廿一日迄御統監、今廿一日御終了あらせられ、天気もよくて有かたき事也。来客、光田寺住職、寄附頼みに。新潟県西蒲原郡国上村早川定一え鴨一番返却ス。

(十一月二十二日〜二十五日、記載ナシ)

十一月二十六日 癸巳 土曜 晴。

朝、勤行済。大詔下る。東宮愈摂政に御就任あらせられる。我等の感泣し奉る。

十一月二十七日 甲午 日曜 晴。

朝の勤行済で、早昼にて正服にて先九条様え参り、恵子様には御目にかゝりて昨日皇太子殿下摂政御就任の恐悦申上、何くれの御咄し申上て、皇太子殿下昨日の恐悦の事ハ今日は其儀なくと申されたり。それより北白川宮邸え参り、内親王様拝謁仰せ付られて何くれと御咄し申上候。明廿八日午後五時半、東京駅より御出発の御趣、仰せられて退出。それより宮城え参内ス。坂下御門より北の御車寄り参る。花松典侍様、親正町典侍様に御目にかゝり、陛下に此よし申上て戴。今日只今皇太子殿下御参内中にて折角なから得あはんと仰せ蒙りたり。御菓子結構に戴て退出す。

*親正町(正親町)

十一月二十八日 乙未 月曜 晴。

朝、勤行済で授業、午後一時五分迄。来客、市の沢、母と。九日結婚に付披露会に出席を頼まれたり。三時半より東京駅え参りて北白川宮内親王様を御待申上たり。四時半御着。皇族殿下、其外実は大勢様御奉送にて拝謁済で、五時半、万歳声裏に御機嫌よく汽車を進められたり。

十一月二十九日 丙申 火曜 晴。

朝の勤行済て、火曜の稽古、昼迄。

十一月三十日 丁酉 水曜 晴。

朝の勤行済て、午下、河鱒子に行、稽古済て畢。

(十二月)

十二月一日 戊戌 木曜 晴。

朝、勤行済。午下一時より築地水交社に行。朝、佐々木氏に行て帰。井上良馨元帥、喜の字の祝にて園遊会、それより余興、夫より食堂に着ス。実は大勢の客なり。さすかにて盛也。

甘利氏来る。河鱒子より三弦を贈られる。

十二月二日 己亥 金曜 晴。

五年生、女子部に行。予ハ休業ス。

(十二月三日、記載ナシ)

十二月四日 辛丑 日曜

午下一時より西光庵に行。綾小路家政様の御一週忌ニ付参詣す。御経畢而帰。

*一週忌(一周忌)

十二月五日 壬寅 月曜 晴。

教授例の如し。午下迄。

十二月六日 癸卯 火曜 晴。 予記 七海菊代結婚式。

火曜の稽古する。午下五時半より帝国ホテルえ、予、李子と。余興も中々立派なるものに盛会也。食事済て帰。

十二月七日 甲辰 水曜 晴。

朝の勤行済。午下二時頃より徒歩して河鱒子え行。夕景また徒歩にて帰。

十二月八日 乙巳 木曜 晴。

朝の勤行済で、佐々木氏え行て帰。今夕、甘利氏来る。九時比地大ゐに
〔空白〕ス。
甘利氏驚かれたり。車にて送る。先々近年稀なる長き事也。

十二月九日 丙午 金曜 晴。

朝の勤行済で、本日より画の試筆稽古する。午下一時半迄。午下六時より如水館二行。市の沢こま子と増地庸治郎氏結婚披露会に出席ス。食事済て帰。此時、少雨ふる、珍らし。畑ヶ谷養鳥所の辺、水道貯水ばく発して床上式尺も水上り大騒動のよし。早速、石山氏、綾小路さまえも見舞出ス。

*畑ヶ谷〔幡ヶ谷〕 *ばく発〔爆発〕

十二月十日 丁未 土曜 雨。

朝の勤行済で、午下より李子、畑ヶ谷え水見舞二行。其惨状、言語に堪たりと。鳥ハホロ々々鳥死したり。外ハみな無事(の)よし也。

*畑ヶ谷〔幡ヶ谷〕

(十二月十一日〜十九日、記載ナシ)

十二月二十日 丁巳 火曜 予記 稽古仕舞。

(十二月二十一日〜三十一日、記載ナシ)

十一月より

○五日午後より 津田氏、中野行、常楽寺、夜九時迄

○七日朝 津田送別東京駅え、原氏、横田、新田え

上野石井氏、築地佐藤氏

○十四日 浅草地明会え

十一月自動車

二日 奥氏築地精養軒 二人

五日 高田馬場より中野え行、帰り浄楽寺え行 *浄楽寺（常楽寺）

七日 東京駅より芝原氏え、横田え、帰り新田え行

七日 上の精養軒より築地精養軒え *上の（上野）

九日 斎藤氏築地精養軒 二人

十四日 浅草地明会

十五日 車 観菊会 往復

十六日 同 閑院様、河はた氏 迎ひ *河はた（河鱒）

十七日 車 堀田 上下 *堀（ママ）田

十九日 若松町 送り

廿日 統一閣

廿四日 若松町 送り

廿五日 上の美術協会 *上の美術協会（上野美術協会）

廿七日 赤坂九条家、北白川宮、宮城参内

廿八日 東京駅 北白川宮奉送